

日本のピア・サポート研究の展望 —論文タイトルを用いたテキストマイニング—

澤田 涼

はじめに

本研究の目的は、日本のピア・サポート研究の傾向を掴み、課題と今後の展望を明らかにすることである。具体的には、テキストマイニングの手法を用いて、ピア・サポート研究を定量的に概観するとともに、特に高等教育領域のピア・サポートの特徴について、他領域との比較から考察する。

教育領域におけるピア・サポートは、一般に、生徒が他の生徒の話に耳を傾け、成長を支援するための実践であり、自己探求と意思決定を促進するように訓練し、スーパービジョンのもとで他の生徒を援助する取組として定義されている（Carr 1981）。また、日本ピア・サポート学会（2020）では、「教職員の指導・援助のもとに、児童生徒・学生相互の人間関係を豊かにするための場を各学校の実態に応じて設定し、そこで得た知識やスキル（技術）をもとに、仲間を思いやり支える実践活動」として、ピア・サポートを定義している。このようなピア・サポートは、高等教育の分野においても政策的に推進がなされている。例えば、ピア・サポートの取組は、文部科学省（2018）の私学助成の傾斜配分に関する条件にも含まれている¹。また、独立行政法人日本学生支援機構（2011, 2014, 2017, 2018）の調査によると、短期大学を除く全ての学校種で、ピア・サポートを実施している機関の割合が上昇しており²、今後も上昇傾向が続くことが予想されている（安部 2017）。

これらピア・サポートの活動の源流は、1904年にアメリカのニューヨークで非行少年に対する支援にあり、その後、1965年の Big Brother・Big Sister Program in a high school から学校教育の分野に取り入れられたものである（西山 2004）。日本においては、池島（2010）がまとめているように、1995年～1996年のいじめの第2波と呼ばれる時期において取り上げられ、特に「非行少年」「いじめ」への対策として注目されてきた。このような日本におけるピア・サポートの研究動向を整理した先行研究としては、大石ら（2007）が挙げられる。この研究では、ピア・サポートの動向を、福祉、保健、学生支援の3つの領域に分けて、それぞれについての展望を示している。また、その後の期間については、伊藤ら（2012）が、がんを対象にしたピア・サポート研究の動向をまとめ、課題整理を行っている。教育領域については、松下（2015）が、ピア・サポートの効果を示すエビデンスに注目して、48本の実践報告を対象としたレビューを行っている。しかし、これらの先行研究は、大石ら（2007）を除けば、個別の領域の研究動向を整理するに留まる。また大石ら（2007）についても、1990年代後半から2000年代前半までのレビューであるため、2000年代後半以降における領域を超えたピア・サポートの研究動向の整理については、課題として残されている。

そこで本研究では、2000年代後半以降を含む期間において、学術雑誌等に掲載された論文、報

告、その他の記事のタイトル（以下、タイトル）の分析から、日本におけるピア・サポートに関する研究動向を概観し、今後の展望について考察する。本研究の特徴は、大量の文字データの分析に適したテキストマイニングの手法を用いることで、特定領域を超えたピア・サポートに関する研究動向を俯瞰し、領域ごとの特徴を定量的に明らかにするところにある。この際、対象とするタイトルにおいては、日本国内のピア・サポート研究の多くが実践報告であることを踏まえ、実践報告を含めた傾向を掴みたい。これらピア・サポート研究の全体像の分析を踏まえて、特に高等教育領域におけるピア・サポートの課題と展望を明らかにすることが、本研究の最終的な目的である。

1. 分析対象と方法

本研究では、CiNii Articles（以下、CiNii）を用いた検索で、ピア・サポートないしピア・サポーターの語を含んだタイトルを分析の対象とする。「レポートや論文の題名は、内容の正確な要約」（井下 2019, p.100）であるため、本研究でも、タイトルを論文等の内容の端的な要約として捉え、ピア・サポートに関する研究動向を俯瞰する³。CiNii のタイトル検索で、「ピア・サポート」「ピアサポート」「ピア・サポーター」「ピアサポーター」のいずれかのキーワードを含むタイトルとして 795 本の研究がヒットした（2020 年 1 月 28 日現在）。そのうち、重複するものを除いた 754 本を本研究における分析対象とした。分析においては、まず、754 本のタイトルを通読し、各タイトルが、高等教育、初等・中等教育、医療・看護・福祉・保健の 3 領域のいずれかに分類できることを確認した。具体的には、表 1 に示すキーワードを基準とした分類を行った。その際、タイトルだけでは分類の判別ができない研究や、領域が複数に該当する研究については、掲載誌が取り扱う領域等を参考に、主たる対象領域がいずれに該当するかを筆者が判断した。その他、掲載誌からも判別できない研究については本文または要旨を確認した⁴。最終的には 754 本のタイトルを、高等教育 170 本、初等・中等教育 332 本、医療・看護・福祉・保健 252 本へと分類し、全体及び 3 領域に該当するタイトル数の年次推移を確認した（図 1）。

次に、テキストマイニングのソフトウェア（KH Coder Ver.3）を用いて、タイトルに含まれる単語に基づく分析を行った。テキストマイニングは「文章から意味のある情報や特徴を見つけ出そうとする技術の総称」（末吉 2019, p.9）であり、「信頼性・客観性の向上とデータ探索」（樋口 2014, p.7）を利点とする。そのため、大量の文字データに対して、客観的な手続きに基づく分析を試みるものである。本研究では、754 本のタイトルを単語レベルで分解し、領域ごとの特徴的な単語を定量的に明らかにするために、テキストマイニングの手法を用いる。具体的には、全体で 10 回以上の出現があった 148 語について、全体及び 3 領域で出現頻度が高い上位 60 語を確認するとともに（表 2）、3 領域のタイトルに用いられる単語の特徴を対応分析によって比較した（図 2）。なお分析に用いた 148 語はタイトルと関係性が薄い品詞は除外している。具体的には、名詞、サ変名詞、形容動詞、組織名、地名、ナイ形容、副詞可能、未知語、タグ（強制抽出された語⁵）、動詞、名詞

B を分析に用いた。対応分析では、「抽出語×外部変数」で分析した。外部変数は、高等教育、初等・中等教育、医療・看護・福祉・保健の3領域の分類である。その他、上位60語の一覧と、対応分析では、全タイトルに含まれる検索語の「ピア・サポート」「ピアサポーター」「ピア・サポーター」「ピアサポーター」を除いている。

表1 3領域の分類に用いた基本的なキーワード

高等教育 170本	「大学」「学生」「初年次教育」に関連するワード
初等・中等教育 332本	「学校・学級・クラス」「教師・生徒・子ども」「不登校・いじめ」に関連するワード
医療・看護・福祉・保健 252本	「病院・障害（障がい）・患者・治療・リハビリ」「出産・妊娠・育児」「老人・思春期」「衛生・災害」に関連するワード

2. 分析結果

まず、タイトル数の年次推移（図1）について、全体的な傾向としては、1987年から2000年が黎明期、2001年から2009年が急増期、2010年から2018年が緩減期としての特徴をもつといえるだろう。なお2019年のタイトル数については、2020年1月28日現在で登録されていないタイトルが含まれると考えられるため、傾向の判断は現段階では保留とせざるを得ない。1987年から2018年の期間における3領域の違いとして、黎明期では、医療・看護・福祉・保健領域のタイトルが登場した後に、初等・中等教育領域のタイトルが続いている⁶。急増期では初等・中等教育領域のタイトルが多いが、緩減期になると医療・看護・福祉・保健領域のタイトルが多い。高等教育領域のタイトルについては、2010年前後に顕著な増加があり、その後は増減を繰り返しながらも、一定の数のタイトルが各年次において発表されている。

次に、上位60語の分析（表2）では、全体としては出現した語の上位5語として、「活動」「支援」「特集」「実践」「研究」が挙がっている。「活動」「支援」「実践」のキーワードの出現頻度が高い理由としては、ピア・サポートに関するタイトルの多くが実践報告としての特徴をもつことを反映していると考えられる。これらタイトル全体における上位5語は、初等・中等教育領域の「支援」を除いて、3領域の上位11語以内にも含まれている。また、初等・中等教育領域の上位語からは、この領域におけるピア・サポートが、「いじめ」など困難とされる対象の「解決」に向けて、「先生」の「生徒」への「指導」として「プログラム」が実施されていることが推察できる。医療・看護・福祉・保健領域の上位語では、「障害」「精神」「がん」が突出して高く、病などの困難に対して仲間集団という観点でピア・サポートの取組が行われていると考えられる。一方、高等教育領域においては、「新入生」「キャリア」といった「学生」に関わる場所の大きい単語が上位に並ぶ。高等教育領域においては、新入生の各高等教育機関への適応や、就職に向けたキャリア支援の文脈において、ピア・サポートが活用されているとの特徴が表れていると考えられる。

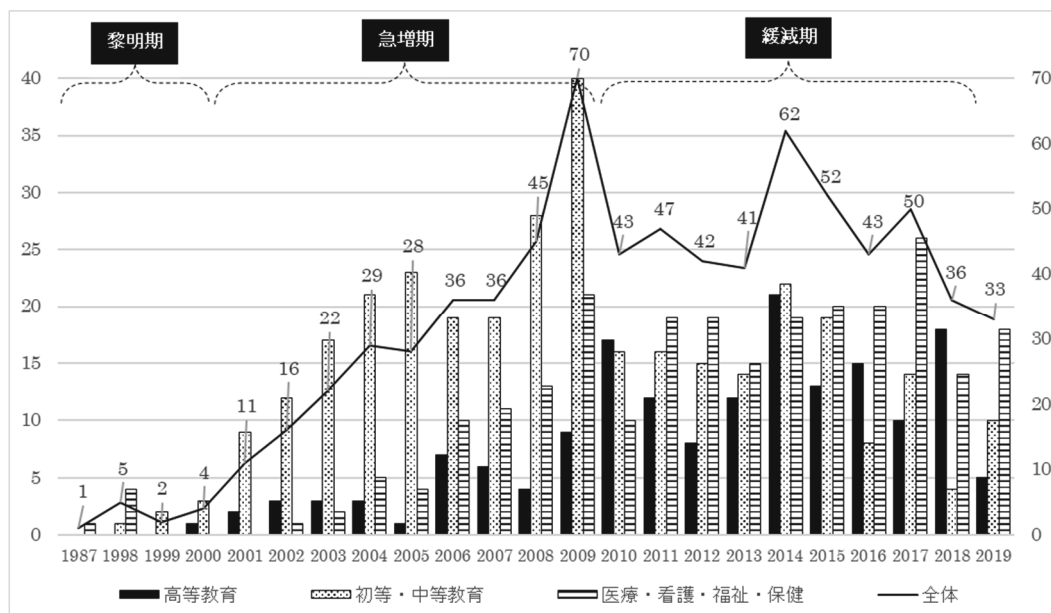


図1 全体及び3領域におけるタイトル数の年次推移

表2 全体及び3領域における上位60語の一覧（全体で出現頻度10回以上の単語に限る）

全体			高等教育			初等・中等教育			医療・看護・福祉・保健		
活動	220	取り組み	35	活動	68	学習	7	学校	98	検討	20
支援	159	先生	35	学生	65	導入	7	活動	92	いじめ	20
特集	140	活用	34	支援	48	システム	7	プログラム	91	課題	19
実践	134	指導	33	教育	33	実施	7	実践	88	試み	19
研究	115	事例	33	大学	33	構築	7	研究	65	大学生	18
プログラム	113	研修	32	特集	26	成長	7	効果	56	小学生	18
学校	105	グループ	31	実践	21	発達	7	教育	55	活用	17
教育	96	トレーニング	31	効果	20	制度	7	特集	54	自己	17
効果	88	解決	31	試み	19	指導	6	子ども	36	連携	17
障害	73	当事者	30	研究	18	グループ	6	生徒	36	活力	17
学生	69	ポスター	29	事例	18	開発	6	発表	35	児童	17
精神	66	開発	29	大学	17	調査	6	先生	35	研修	15
社会	54	学会	29	課題	16	意義	6	関係	31	学習	15
地域	51	生活	29	報告	16	体制	6	解決	31	対象	15
がん	49	自己	28	相談	15	社会	5	社会	27	評価	15
課題	48	小学校	28	プログラム	14	関係	5	指導	27	支える	14
子ども	46	現状	27	考察	14	研修	5	小学校	27	サポート	13
相談	45	支える	27	取り組み	13	自己	5	中学校	27	取り組む	13
関係	44	中学校	27	新入生	13	対象	5	相談	25	同士	13
日本	44	医療	25	立命館大学	12	サポート	5	日本	25	導入	13
検討	43	学習	25	キャリア	11	仲間	5	トレーニング	25	訓練	13
患者	42	考察	25	体験	10	センター	5	支援	24	総会	12
試み	42	連携	25	養成	10	高等	5	心理	24	高校生	12
大学	39	委員	24	検討	9	情報	5	ポスター	24	講演	12
保健	39	学級	24	活用	9	トレーニング	4	委員	24	教師	12
発表	38	困る	24	現状	9	訓練	4	困る	24	仲間	11
生徒	37	対象	24	年次	9	評価	4	中学生	24	授業	11
大学生	37	中学生	24	障害	8	可能	4	学級	23	感情	11
心理	36	サポート	23	育成	8	働	4	保健	21	始める	11
報告	36	育成	23	中心	8	講座	4	開発	21	学会	10
		大会	23			今後	4			育成	10
						授業	4			目指す	10
						向ける	4			自尊	10
										適応	10
										スクール	10
										教員	10
										カウンセリング	10

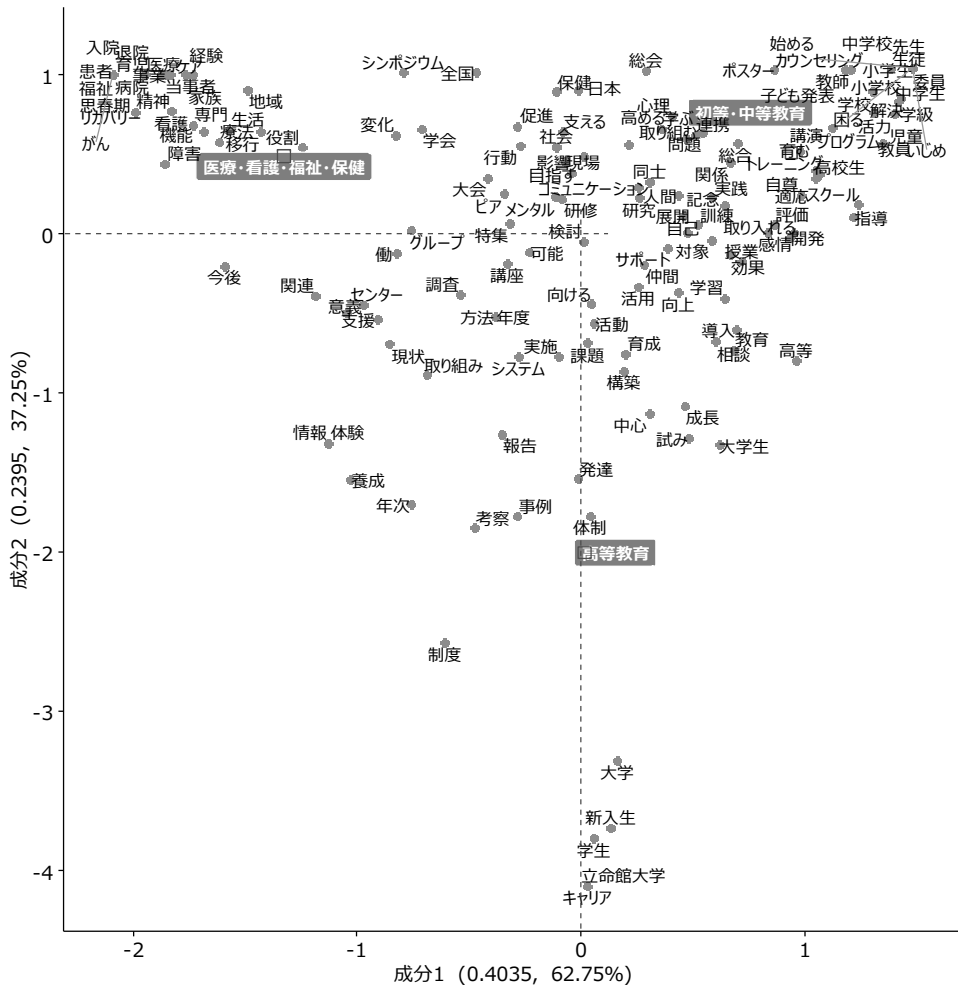


図2 「抽出語×外部変数（3領域）」の対応分析（全体で出現頻度10回以上の単語に限る）

対応分析の結果（図2）について、縦軸は、高等教育領域に特徴的な単語か、それ以外の領域に特徴的な単語かの区分に関わると考えられる。横軸は、医療・看護・福祉・保健領域に特徴的な単語か、教育領域に特徴的な単語かの区分に関わると考えられる。このうち高等教育領域については、「制度」「体制」などが特徴的な単語であることがわかる。また、初等・中等教育領域との対比において、「心理」「感情」「自己」といった単語に対し、高等教育領域が一定の距離を有することも注目できる。高等教育領域のピア・サポートは、初等・中等教育領域に比べると、個人の心理や感情への関わりに限定されない、組織への対応を活動内容に含むところに特徴があるのではないかと考えられる。更に、初等・中等教育領域や医療・看護・福祉・保健領域と比べると、高等教育領域の周辺においては、特徴的な単語の集中的な配置がない。このことは、高等教育のピア・サポートに関するタイトルが広い範囲を対象としており、相互の関連が薄いためではないかと推測できる。

おわりに

本研究では、日本のピア・サポート研究の動向を、論文タイトルのテキストマイニングを通じて分析した。分析からは、まず日本のピア・サポート研究の主たる対象が、高等教育、初等・中等教育、医療・看護・福祉・保健の3領域に大きく分類できることが明らかとなった。また、初等・中等教育領域の特徴が「いじめ」を中心とした児童・生徒が抱える問題への対応、医療・看護・福祉・保健領域の特徴が「がん」を中心とした病への対応であるのに対し、高等教育領域の特徴は「新入生」「キャリア」といった学生に関わる課題への対応にあった。さらに対応分析による高等教育領域と他の領域との比較からは、高等教育領域においては個人の感情支援に留まらない、制度・体制といった組織への対応が課題となっていること、及び、高等教育領域におけるピア・サポートが幅広い課題に対して展開されていることが推察できた。

近年、高等教育領域のピア・サポートにおいては、従来対象としてきた新入生支援やキャリア支援に加えて、自殺予防対策（齋藤ら 2018）や、地域支援（栗原ら 2019）などの新しい課題に対する実践報告も発表されており、さらに幅広い課題に対する需要が拡大することが予測される。同時に、本研究の知見を踏まえるならば、従来の課題と、新しい課題の双方において、制度や体制の構築といった組織課題を併せて考えていくことが、高等教育領域においては特に必要とされるのではないかと考えられる。

他方、本研究の分析は、対象をタイトルに限定している点に限界がある。高等教育領域のピア・サポートにおける対象範囲の広がりや、組織対応の必要性など、本研究が注目した全体及び3領域の特徴が妥当なものであるか否かについては、研究の本文の内容も含めたテキストマイニング、あるいは内容分析を通じて、より深く、正確に検討していく必要がある。これら、研究全体を対象とする研究動向の整理、俯瞰については、今後の課題としたい。

【注】

- 1 「平成 30 年度私立大学等改革総合支援事業調査票」において、「TA 等の教育サポートスタッフの資質の向上を図るために、定期的な研修などの取組を実施していますか」の要件等に「本設問における『教育サポートスタッフ』とは、TA、SA、メンター、ピアチューター等の大学等における教育研究活動をサポートする学生スタッフとする」と定められている。
- 2 各高等教育機関の「ピア・サポート等、学生同士で支援する制度の実施」状況について、平成 22 年度（2010 年度）から平成 29 年度（2017 年度）まで 4 回に渡り調査を行っている。大学全体で、平成 22 年度（2010 年度）35.6%、平成 25 年度（2013 年度）43.6%、平成 27 年度（2015 年度）49.3%、平成 29 年度（2017 年度）52.4%と年々上昇している。
- 3 加藤（2007）のスクールカウンセリング、佐久嶋ら（2012）の臨床神経学、三尾ら（2017）の看護教育、厨子（2018）のスクールソーシャルワークなど、タイトルを用いて各テーマについての動向と課題を確認する先行研究もある。

- 4 例えば、亀山ら（2002）は「生徒保健委員会」の語から初等・中等教育領域と判断した。上岡（2014）の場合には、「障がい」と「学生」のキーワードから領域が複数該当するため、掲載誌「リメディアル教育研究」が大学の初年次教育に特化した媒体であることから高等教育領域と判断した。また、稲永（2010）の「学級経営的」のように、分類に関わるキーワードが曖昧な形で用いられている場合には、掲載誌及び本文を確認し、高等教育領域に分類した。
- 5 強制抽出した語は、検索語である「ピア・サポート」「ピアサポート」「ピア・サポーター」「ピアサポーター」と、単語として適切に抽出されなかった「リカバリー」である。
- 6 1987 年から 1998 年までの 11 年間は CiNii の検索結果から外れている空白期間である。

〔文献〕

- 安部有紀子, 2017, 「課外活動・学生表彰・ピア・サポート・ボランティア活動」『大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成 29 年度）結果報告』独立行政法人日本学生支援機構, pp.133-144（2020 年 1 月 28 日取得, https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2018/11/29/2_bunseki.pdf）
- Carr, Rey A, 1981, The Theory and Practice of Peer Counselling, Peer Resources
- 独立行政法人日本学生支援機構, 2011, 「「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査（平成 22 年度）」集計報告（単純集計）」,（2020 年 1 月 28 日取得, https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2015/10/08/torikumi_chousa.pdf）
- 独立行政法人日本学生支援機構, 2014, 「「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成 25 年度）」集計報告（単純集計）」,（2020 年 1 月 28 日取得, https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2015/12/08/h25torikumi_chousa.pdf）
- 独立行政法人日本学生支援機構, 2017, 「「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成 27 年度）」集計報告（単純集計）」,（2020 年 1 月 28 日取得, https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2017/02/14/h27torikumi_chosa.pdf）
- 独立行政法人日本学生支援機構, 2018, 「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成 29 年度）結果報告」,（2020 年 1 月 28 日取得, https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2018/11/29/1_kekka.pdf）
- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- 池島徳大, 2010, 「集団の共同性意識の再構築とピア・サポート」『学校教育実践研究』第 2 巻, pp.31-42
- 稲永努, 2010, 「ピアサポート・グループの凝集性を高める 3 要因—指導スタッフによる学級経営的役割を軸として—」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第 3 号, pp.45-56
- 井下千以子, 2019, 『思考を鍛えるレポート・論文作成法（第 3 版）』慶応義塾大学出版会

- 伊藤奈美・平野文子, 2012, 「がん領域におけるピアサポートの生涯学習的視点」『島根県立大学出雲キャンパス紀要』第7巻, pp.119-126
- 亀山寿栄・山本章・赤田信一, 2002, 「生徒保健委員会活動実践報告—ピア・サポート的な実践—」『静岡大学教育実践総合センター紀要』No.8, pp.121-133
- 加藤博己, 2007, 「論文タイトルから見たスクールカウンセリング研究の文献数の推移と研究内容による分類」『駒澤大学心理学論集』第9号, pp.85-94
- 栗原ひとみ・古川繁子・金子功一, 2019, 「大学におけるピア・サポート活動の実践と課題—地域展開に対して大学としてどのような貢献ができるか—」『植草学園大学研究紀要』第11巻, pp.89-99
- 松下健, 2015, 「本邦の教育領域におけるピア・サポート研究の展望」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第8巻, pp.227-239
- 三尾弘子・林さえ子・福田博美・藤井紀子・小川真由子・水野昌子・植田ひろみ・永石喜代子, 2017, 「看護のシミュレーション教育のロールプレイに関する文献検討—論文タイトルのテキストマイニング (KH Coder) を用いた分析—」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究』第3巻第1号, pp.215-222
- 文部科学省, 2018, 「平成30年度私立大学等改革総合支援事業調査票 (タイプ1~4)」(2020年1月28日取得, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/02/26/1413852_09.pdf)
- 日本ピア・サポート学会, 2020, 日本ピア・サポート学会ホームページ (2020年1月28日取得, <http://www.peers-jp/idea.html>)
- 西山久子, 2004, 「諸外国のピア・サポートの歴史と動向—学校現場での仲間支援活動の起源から現在まで—」『ピア・サポート研究』創刊号, pp.39-42
- 大石由起子・木戸久美子・林典子・稲永努, 2007, 「ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第13号, pp.107-121
- 齊藤和樹・播摩優子・熊地美枝・木村滋・佐藤美佳, 2018, 「「ピアサポーター養成講座」実施報告」『日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要』第23号, pp.21-26
- 佐久嶋研・佐々木秀直・田代邦雄, 2012, 「テキストマイニングを用いた学会誌論文タイトルの時系列分析—日本神経学会誌「臨床神経学」の分析—」『医療情報学』32巻6号, pp.315-321
- 末吉美喜, 2019, 『テキストマイニング入門 Excel と KH Coder でわかるデータ分析』オーム社
- 上岡義典, 2014, 「組織的でない発達障がい学生へのピアサポートの重要性と可能性」『リメディアル教育研究』第9巻第2号, pp.144-148
- 厨子健一, 2018, 「わが国におけるスクールソーシャルワーク研究の動向と課題—論文タイトルを用いたテキストマイニング—」『教職キャリアセンター紀要』vol.3, pp.35-44